

もう一度聞きたい日本語

—村松先生の退官にあたって—

森山 新

私が本学の留学生センターに来て3年になるうとしている。この間、最も身近にあって私達を指導、叱咤激励してくださったのが村松先生であった。とりわけ私の場合は海外から本学へ赴任し、日本の大学運営についてはわかっていないことがあまりに多かっただけに、村松先生の存在は非常に大であったと思う。

また村松先生は音声・音韻教育をご専門としていらっしゃった。言語教育において、この分野は欠くことのできないものであり、その意味で留学生センターでの留学生への日本語教育と、大学院での日本語教育学教育・研究の両面において大きな損失と言わざるを得ない。

もう一点、私が授業を行いながら、ふと村松先生を思い出すことが何度もあった。それは村松先生がNHKアナウンサーのご経歴を持たれ、非常にきれいで正しく、なおかつわかりやすい日本語で話されることが理由であった。その一方で私はと言えば、10年間韓国で生活し、その間韓国語を生活言語にしていたため、私が発する日本語は、知らず知らずのうちに韓国語へのコードスイッチングが起こってしまったり、韓国語の負の転移（第二言語の母語への転移）がありありと認められる日本語をとなくなってしまったりしていた。またこれは私個人の日本語能力の面だけではなく、日本語教師の職業病であるのかもしれないが、敬語などの待遇表現などが回避され、デス・マスで貫かれていたり、平易な日本語表現ばかりが選ばれる傾向があったりした。その意味では留学生に対し、正しい日本語を教えられないのではないか、きれいな日本語を教えられないのではないかと思ってしまう、そんな時に、きれいな日本語の持ち主でいらっしゃる村松先生のことを思い出されるのであった。しかし何度か村松先生の話し方を物まねのように実践してみたが、所詮それは無理なことであり、私は私の色でやるしかないとおきらめたものだった。

最近、声に出して読みたい日本語などという本がよく売れているようだが、村松先生の日本語はまさしく何度聞いても心地よい響きと趣があり、それこそ留学生に限らず私達までもが、もう一度聞きたい日本語、また聞きたい日本語として私達の鼓膜に

染み付いている。

今や本学でその心地よい響きを耳にすることはできない。野鳥の美しい響きが聞かれなくなってしまった野山のように、何か寂しく物足りない気持ちになる。村松先生の講義は教員である私達は直接聞いたことは少ないのであるが、最終講義で先生が語られたことなどを思い起こしながら、留学生たちに少しでもきれいで正しい日本語を聞かせてあげられるよう努力して行きたい。それが3年間お世話になった先生へのご恩返しであると思っている。